

【渡辺雲儼】 わたなべうんげん

矢野町出身の日本画家

よみがえった歴史の二コマ

山崎 達夫

●はじめに

ある日、父の残した掛軸を整理するなかで、「渡辺雲儼」氏（以下敬称略）という日本画家の説明を記した父のメモ書きに目がとまった。明治生まれの耶馬溪画で知られる矢野町の人と書かれていた。祖父も父も矢野町砂原で医院を開業し、私はそこで生まれたことから、矢野町には親しみがあつた。より詳しく知りたいと思ひ、ネットで検索してみたが、出身は広島市としか書かれていなかった。はたして本当に矢野町出身なのかどうか検索を続けるうち、偶然にも「渡辺雲儼」の孫娘さんを知ることができた。そこで、孫娘さんのお母様と伯母様、すなわち「渡辺雲儼」のお二人のご息女がご健在であることもわかった。驚きのドラマがここから始まるのである。

●やり取りの経緯

私家には祖父の代からの「渡辺雲儼」の掛軸が4本残されている。数少ない私家の掛軸のなかで、同じ画家のものが4本もあるのは、なにか訳でもあるのだろうかと思つていた。祖父も父も矢野町砂原で医院を開業し、私はそこで生まれたことを伝え、孫娘さんに「渡辺雲儼」は矢野町の出身かどうか、そうであれば住所の字名をお聞きしてみた。

彼女には、祖父にあたる「渡辺雲儼」の作品は、たとえばどこかに残つていたとしても、その絵にまつわる情報は、自分が次世代に伝えなくては消えてしまうということの懸念があつた。そのため、彼女のお母様や伯母様からの情報はもとより、あらゆる機会を通じて「渡辺雲儼」に関する情報を集める努力をされていた。そのような時にたまたま私が連絡をしたのである。

私への返信には、―矢野町の造り酒屋で「神田屋」という屋号の渡辺家の次男として出生し、早くから絵を学び、後に京都で鈴木松年に学び、「嘯月庵雲儼」の号を与えられた。後に憬れていた耶馬溪に入り大分県中津市に住まいを定めた―と書かれていた。また、私の父の名前や入手した経緯を問われ、掛軸の写真でもあれば、お母様にも見せることができるかと書かれていた。彼女のお母様にも話し記憶があるかどうか聞いてみるそうだった。

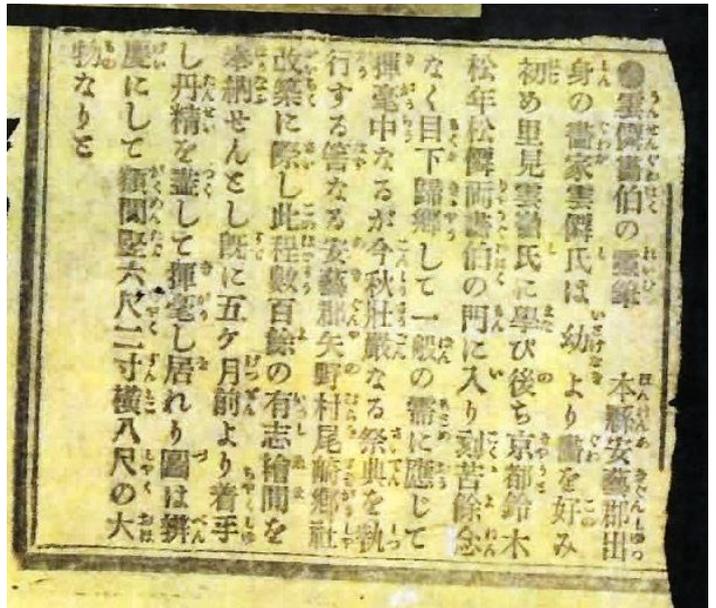
また、彼女の住居は愛知県であるが、お母様の居られる実家の大分県中津市では、今年偶然にも「渡辺雲儼」生誕120周年没後40周年の節目の年にあたり、地元の耶馬溪町にある耶馬溪風物館において『雲儼展』という作品展が今まさに開催されている最中であつた。そのため帰省の便があり、そこでお送りした私の手紙と掛軸の写真を見ていただくことになった。手紙には、私の住んでいた家の位置を説明するため、古くから存在している目印となる建物として、尾崎神社と長慶寺を記し、長慶寺の隣が我が家であつたと書いておいた。

●歴史の一コマ（大正5年）

返信のなかに古い1枚の写真と2枚の古い新聞記事があった。その写真（図①）は、弁慶が釣鐘を背負う大きな絵馬と一緒に写った「渡辺雲儼」であった。新聞記事のうちの1枚は、その写真に関する大正5年9月の記事であった。



図①



図②

この大正5年9月の新聞記事（図②）には、「渡辺雲儼」が京都より矢野町に一時帰郷していた時、今秋の荘厳なる祭典に向けての尾崎神社の改築に際し、数百名もの有志が奉納するための絵馬を手がけた。五ヶ月前より着手し、図は釣鐘弁慶で、額面は縦6尺2寸横8尺の大きな物である。―という内容が記載されていた。

そもそも私は「渡辺雲儼」の出生地が矢野町のどの辺りであるのか知りたくて、地図上の目印として尾崎神社と長慶寺を記載したのである。ところが、まさにその尾崎神社に「渡辺雲儼」の描いた絵馬が古くから存在していた事実を知り仰天した。

私は数種の、矢野町内の見どころが記載された案内書を見てきたが、「渡辺雲儼」のことは紹介されていなかったように思う。多

くの人々によって絵馬が奉納された当時には、新聞記事にも取り上げられ、矢野町民の多くは知っていたと思われるが、時代の経過とともに、矢野町出身の日本画家「渡辺雲僊」は、彼の描いた絵馬とともに忘れ去られたようだ。

現存しているのであれば、ぜひとも見てみたいとの想いが募り、早速尾崎神社へ向かった。当日神社へ向かう途中、矢野町に古くから居住されている方や、神社に参拝にいられた方に、釣鐘弁慶の絵馬の有無を聞いてみたが、どなたの返事も不明とのことであった。不安になりつつも期待を持ち、拝殿を開けてもらった。恐る恐る中を見回すと、正面右手の窓枠の上部に、送って頂いた大正時代の古い写真と一致する絵馬が、鮮やかな色彩で掲げられていた。(図③)



図③

塗り直されたようであったが、大きくて立派な絵馬にしばし見とれた。こうなると、なにか宝物を発見したような気持ちになった。名を成した日本画家の作品なので、矢野町や尾崎神社が誇れるものである。主に耶馬溪画で名を成した「渡辺雲僊」の作品が、だれでも自由に見ることができるのである。尾崎神社にお参りの際には、郷土が生んだ日本画家の絵馬をぜひとも見ていただきたい。因みに、広島県立美術館には「渡辺雲僊」の作品『金鱗玉藻』が収蔵されている。

私達は昔から初詣や宮参りなど、人生の節目ごとに神社に詣でることが多い。しかし、お参りとともに、奉納された絵馬などをじっくりと見て、その絵に思いをはせることは少ない。この度のこと、絵画にかぎらず先人の残したものを、世代を受け継ぐ者が伝えてゆく努力の必要性を痛感した。今回の事からも、本誌を発行している「矢野郷土文化サークル」のような組織の役割は大きいし重要である。

矢野町において、明治・大正・昭和そして平成へと、時の流れのなかで人々の記憶から眠りに入った「渡辺雲僊」という日本画家と、尾崎神社にある彼の描いた絵馬が、折りしも生誕120周年没後40周年の節目の年にあたるこの年、出生地矢野町で眠りから覚めた。後を受け継ぐわれわれが「渡辺雲僊」が再び眠りにつかないように、しっかりと見守る努力が求められる。

これからは、神社お参りの際には「脚下照顧」ならぬ「頭上照顧」を心がけたい。

●歴史の一コマ（大正13年）

さて、もう1枚の新聞記事は大正13年11月のものである。「渡辺雲僊」が大正13年11月に、耶馬溪から矢野町に帰郷した際の記事である。(図④)

雲僊畫伯の 席上揮毫

並びに歓迎會

廣陵の地臥虎山下で一般の需に應じ揮毫することゝなつた嘯月庵雲僊畫伯は安藝郡矢野町の出身であるので郷黨の譽として町有志發起で十一日席上揮毫並に歓迎會を開催した朝來景品入の煙火は間斷なく冲天に作烈して氣勢を揚げ午前九時から長慶寺庫裡で席上揮毫本堂には同伯の作品數百點を陳列し揮毫を需むる人或は觀覽の人殺到し大盛會裡に午後五時閉會六時から農會市場樓上で歡迎宴を開いた雲僊畫伯同母堂並に實兄文友氏を主賓に會員百數十名着席發起人代表中高下義三氏の挨拶山崎町醫の祝辭畫伯並に文友氏の謝辭があつて開催美妓酒間を斡旋し餘興としてくじ引あり大盛會裡に十時散會した

図④

雲僊畫伯の 席上揮毫

並びに歓迎會

廣陵の地臥虎山下で一般の需に應じ揮毫することゝなつた嘯月庵雲僊畫伯は安藝郡のまちしゅつしんのであるので郷黨の譽として町有志發起で十一日席上揮毫並に歓迎會を開催した朝來景品入の煙火は間斷なく冲天に作烈して氣勢を揚げ午前九時から長慶寺庫裡で席上揮毫本堂には同伯の作品數百點を陳列し揮毫を需むる人或は觀覽の人殺到し大盛會裡に午後五時閉會六時から農會市場樓上で歡迎宴を開いた雲僊畫伯同母堂並に實兄文友氏を主賓に會員百數十名着席發起人代表中高下義三氏の挨拶山崎町醫の祝辭畫伯並に文友氏の謝辭があつて開催美妓酒間を斡旋し餘興としてくじ引あり大盛會裡に十時散會した

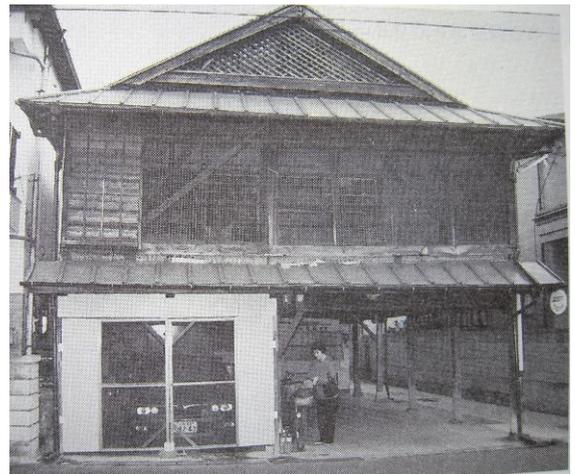
図④の記事は時代が経過して判読しにくいので、新たに書き写したものを図④の下部に示した。この記事を読むと、驚くべきことが書かれてあった。

記事の見出しにあるように、「渡辺雲僊」の席上揮毫と歓迎会が出生地矢野町で開かれたのである。書き出しから見えていくと、臥虎山というのは、私が自宅の窓からいつも見ている広島市南区にある比治山の別称である。比治山の麓か周辺の地域で揮毫する催しがあったようである。

「渡辺雲僊」は矢野町の出身であることから、矢野町の誉れとして有志が発起人となり、大正十三年十一月十一日に席上揮毫と歓迎会が開催された。当日は朝から景品入りの花火（音物や袋物）が間断なく打ち上げられ、午前九時から長慶寺（図⑤）庫裡で席上揮毫が行なわれた。また、本堂において百点もの作品を陳列し、揮毫を求める人や観覧する人が殺到して、盛会裏に午後五時に閉会したと記載されていた。



図⑤



図⑥

先に述べた尾崎神社の絵馬の件と同様、地図上の目印として記載していた長慶寺までもが「渡辺雲僊」の足跡の舞台となっていた。そのため、言葉で言い表せない驚きがあった。なにか運命的な導きがあったのかもしれない。引き続き午後六時から矢野町農会市場の建物（図⑥）に会場を移し、歓迎会が開かれた。残念なことこの建物は、数年前に取り壊されたようであった。この建物は1階が一部駐車場になっているが、当時からのものである。この2階で歓迎の宴が催されたと思われる。

雲僊画伯と母堂並びに実兄の文友氏（元矢野町助役）を主賓に会員百数十名が参加し、まず初めに発起人代表として、中高下義三氏（矢野信用組合の設立者）が挨拶をされた。続いて山崎町医が祝辞を述べたと記されていた。この記事をまのあたりにした瞬間、私の胸は高鳴り、なにか熱いものがこみ上げてきた。驚嘆しつつ、私の目は山崎町医と記された部分にくぎ付けとなった。この町医こそ、私の祖父山崎員郎なのである。私は祖父の祝辞の言

葉をしばし想像しながら想いをめぐらし、それを夢うつつで聞いていた。少し落ち着いてから読みすすめると、祝辞に続き、画伯と文友氏の謝辞があったと記されていた。美しい芸者も加わって酒宴が開かれ、余興としてくじ引きがあり、盛会裏に十時に散会したと記載してあった。

祖父は私が生まれる2年前に他界しているので、お互いに顔を見たことはない。しかし、「渡辺雲僊」の実家の住所を調べるなかで、彼が残した絵馬の存在が判明したことに加え、私の祖父が彼の歓迎会に出席し、しかも祝辞まで述べていたことを知り、表現の言葉が見当らない大変な驚きと、ある種の感動すら覚えた。私の祖父と「渡辺雲僊」とがこの席で言葉を交わしたことは、想像に難くない。私は、ある偶然のきっかけから「渡辺雲僊」の孫娘さんを知り、連絡を取るようになった。また、私の祖父は「渡辺雲僊」の歓迎会で祝辞を述べたことから、会話をしたに違いない。お互いの孫同士がつながった結果、大正・昭和・平成へと時代の変遷をへて、このたび、祖父同士も同様につながっていたことが判明したのである。なんとという奇跡であろうか。何色かは分らないが、糸でつながっていたようである。

●おわりに

矢野町に一時帰郷した際、町民有志の発案で揮毫と展示会が催されたということは、「渡辺雲僊」という矢野町出身の名を成した画家を、矢野町民が評価していた証であろう。今日のような娯楽の少なかった当時においては、早朝から景品付の音物の花火を打ち上げるの展示会や歓迎会は、矢野町のお祭りに匹敵する大きなイベントであり、多くの町民が訪れたにちがいない。

記事の初めから終わりまでの流れを、舞台となった長慶寺や矢野町農会市場と重ねて想い描いてみると、当時の風景が手に取る

ように想い浮かぶ。頭の中で容易にタイムスリップでき、写真でしか会ったことのない祖父に会えるような気がした。会えたら声をかけ、話をしてみたい気になってきた。

あいにく、当時のまま残っていた矢野町農会市場の建物は、数年前に取り壊されたため見ることはできない。この建物の前に立つて2階で開催された宴会を想像してみたかったが、時すでに遅しである。

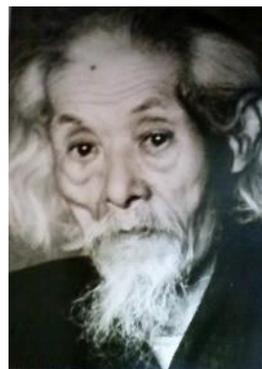
住所を知る手がかりとして記した尾崎神社と長慶寺の両方の場所と矢野町農会市場に、「渡辺雲僊」に関係したドラマがあり、今回その内容が明白になった。早速、我家に残る祖父の写真をじっくりと見つめながら、大正時代のほんの二コマではあったが、時代のロマンを感じた。「渡辺雲僊」の掛軸のもとで、しばし祖父の人生に想いを馳せてみたい。

この度の調べにあたり、夢中になって矢野町を何回か往復した。出不精の私の何がそうさせたのかを考えてみた。思い当たる理由はこれである。私のルーツは、まさにここ矢野町であるからだ。ここ矢野町砂原の自宅(図⑦)で私が生まれたのである。私の場合は、一ふるさととは近きにありて思ふもの、なのである。



図⑦

●「渡辺雲僊」の略歴



本名渡辺俊彦 明治25年(1892)広島県安芸郡矢野町の造り酒屋の渡辺家(神田屋)の次男として出生。十一才のとき広島の見雲嶺画伯に日本画を学び、「啓迪」と号した。明治41年(1908)に京都東の洞院にて、円山・四条派の流れをくむ鈴木松年(鈴木派1848~1918)に学び「嘯月庵雲僊」の号を与えられた。同時代、松年の元では鈴木松僊(1872~?)・土田麦僊(1887~1936)、そして上村松園(1875~1949)らが席を連れ、後の京都画壇を代表する画家を輩出している。雲僊の初期の画風には、この松年の大胆で豪快、そして荒々しい筆法に倣うものがある。僧籍をもち、画禅一如の境地を目指し、同郷の頼山陽を慕って耶馬溪に入り、生涯をかけて耶馬溪を描き続けた。求めに応じて襖絵や仏画も描いた。耶馬溪といえは雲僊、雲僊といえは耶馬溪といわれた。晩年は絵筆を置き、俳句・陶芸・細工にも精通した。昭和47年(1972)八十歳にして永眠した。作品に「深耶馬溪錦豊」「羅漢寺白光」(大分市美術館)や、「金鱗玉藻」(広島県立美術館)、600枚もの「耶馬溪探勝図」等がある。

渡辺俊彦氏は初めに「啓迪」と号している。明治3年に長慶寺本堂に造られた「啓迪舎」(現在の矢野小学校)が由来かもしれない。

補遺

嘯月庵

雲僊畫伯

歡迎席上譚會

嘯月庵雲僊畫伯は安芸郡矢野町の生れで幼少より斯道を好み十一歳の時廣島見雲嶺畫伯の門に天才大人も及ばず感術の連筆と熱心な意氣は能く萬千の物像筆に任せて鮮であつた十八歳の六月西都東の洞院鈴木松年、松僊兩畫伯の門に入り星霜を重ねること三年餘辛遊遂にその蘊實を究めたので嘯月庵と號され師の指令に従つて内外自然の天地に向ふ時雲僊と號した大正四年山陽を下り山口縣下に遊び藤原天鏡禪師に會ひ深く參禪し自ら無食生尊の主義を精進してその跡筆人の簞く所となつた偶々九州耶馬の絶景を聞くや欣慕し大正六年十一月北豐原城下に着し養壽精舎の小禪宮の一室に靜處すること五年大正十年六月耶馬山靈に接し一年有半専心その實景を寫すの外他意なく遂に十一年六月耶馬飛來峰の一窟に耶馬探勝記念の草庵を結び自ら楯を振つて窟内の岩壁に雲僊窟と大字を號刻して風流墨客の遊居とすべく耶馬の山靈に語

つて獨り悠然として六白有餘の作品を得出山十三年十一月山口縣下を経て今回故山に歸り廣陵の地臥虎山下で一般の需めに應じ揮毫することとなつた氏は權勢に畫かず名利を求めず天職を樂み悠々自適筆端の廻勁と氣韻の高遠とを理想とし意氣雲の如く趣味亦多し嘯月庵一流の畫風を見ることは郷黨の榮譽とし十日歡迎會を開催する午前九時から長慶寺で披露畫會へ席上揮毫午後五時から戸田料亭で歡迎宴會を開く當日は數十發の煙火とともに景品券を打ち揚げ拾得者には畫伯の揮毫を一枚づゝ渡すことであるから一層の賑ひを添へることであらふ

(図⑧)は先に紹介した記事とは別の新聞記事である。「渡辺雲僊」の経歴や人柄が詳しく記載されているので、新たに書き写したものを左記に示す。

嘯月庵

雲僊画伯

歡迎席上画會

嘯月庵雲僊画伯は安芸郡矢野町の生れで幼少より斯道を好み十一歳の時廣島里見雲嶺画伯の門に天才大人も及ばず感術の運筆と熱心な意氣は能く萬千の物像筆に任せて鮮であつた十八歳の六月西都東の洞院鈴木松年、松僊両画伯の門に入り星霜を重ねること三年餘辛楚遂にその蒞實を究めたので嘯月庵と號され師の使命に従つて内外自らの天地に向ふ時雲僊と號した大正四年山陽を下り山口縣下に遊び藤原天鏡禅師に會ひ深く参禅し自ら無食生尊の主義を精進してその跡筆人の驚く所となつた偶々九州耶馬の絶景を聞くや欣慕し大正六年十一月北豊扇城

下に着し養壽精舎の小禅宮の一室に静處すること五年大正十年六月耶馬山靈に接し一年有半専心その實景を寫すの外他意なく遂に十一年六月耶馬飛來峰の一窟に耶馬探勝記念の草庵を結び自ら槌を振つて窟内の岸壁に雲僊窟と大字を號刻して風流墨客の遊居とすべく耶馬の山靈に語つて獨り悠然として六百有餘の作品を得出山十三年十一月山口縣下を経て今回故山に歸り廣陵の地臥虎山下で一般の需めに應じ揮毫することとなつた氏は灌勢に画かず名利を求めず天職を樂み悠々自適筆端の廻勤と氣韻の高遠とを理想とし意氣雲の如く趣味亦多し嘯月庵一流の画風を見ることは郷黨の榮譽とし十日歡迎会を開催する午前九時から長慶寺で披露画會へ席上揮毫午後五時から戸田料亭で歡迎宴會を開く当日は数十発の煙火とゞもに景品券を打ち揚げ拾得者には画伯の揮毫を一葉づゝ渡すことであるから一層の賑ひを添へることであらふ

歓迎会を知らせる花火の記述で、先に説明した新聞記事(図④)より詳しく記された部分が興味深い。打ち上げられた景品入り花火の景品とは、なんと「渡辺雲僊」の揮毫した絵の引換券であった。引換券を拾得した人は、彼の作品を手に入れたに違いない。

私の家にある4本の掛軸は、「渡辺雲僊」の絵画の席上揮毫と歓迎会に出席した折に、祖父が買い求めたものである。歓迎会には百数十名が参加したと記されているので、開会の挨拶をされた中高下義三氏をはじめ多くの方々や、花火に込められた引換券を拾得した数名の方々の家にも、「渡辺雲僊」の作品があつたはずである。幸いにも矢野町は、原爆による直接の被害をまぬがれた。したがって、どこかの家に「渡辺雲僊」作と知らぬまま作品が保管されている可能性がある。この機会にぜひお持ちの掛軸を調べてほしい。もしこのお宝が数点でも出てくれば、矢野町公民館で展示鑑賞会を企画してもらおうことも夢ではない。参考までに「渡辺雲僊」の名と落款を示しておく。(図⑨)



図⑨

昭和40年頃の絵馬の写真(図⑩)



図⑩

大分県中津市の「耶馬溪風物館」で開催中の『雲僊展』のポスタ
ー(図⑪)



図⑪

◎稿を終えるに当たり、拙稿に掲載の場と多くの助言を頂いた矢野郷土文化研究サークル 発喜会会長 楠 精洲氏に感謝します。

◎参考資料

- ・多くの資料の提供を「渡辺雲儼」氏のご親族から受けた。
- ・図⑤を発喜会発行の「発喜のしおり」、図⑥を同じく発喜会発行の「今昔の感」から引用させて頂いた。

筆者紹介



祖父・父ともに昭和三二年まで矢野町砂原で山崎医院開業
昭和二五年 矢野町砂原で出生
菊水幼稚園 第一回卒園